

歴史の町、甲良町

笹井俊一

彦根35万石の藩領当時の甲良町の生産高は1万4千石、と記録されている。いま人口8500人の甲良町は彦根市との合併を希望しているが、課題があると聞く。歴史の深い、長いつながりからしても、早い解決が望まれる。

甲良町は農業の町、との印象がつよい。専業、1種、2種あわせて700戸が今も甲良米の名声を維持する稲作水田地帯である。工業に立地を求め開発によって農村が姿を消した中であって、甲良町はバブル期にも多分おしとどまり、華やかな住居も見当らず、水辺を親しむことができているのは、近くの彦根市や京阪に就業の場があったから、という見方もできるのではないか。ベッドタウンになるには遠すぎたことも、今に農村の姿をとどめることに幸いした。

農政は「猫の目行政」と言われた時代が長くつづき、様々の議論、施策、反省があったが、日本の食文化を担ってきた歴史の重さが、納得のゆく方向にはならなかったと言える。

「幸いした」と考えたのは、甲良町はこれからの社会の変化に対応できるからである。

私の住む松本市島内が農村だったころ、道路沿いに多くの生業の店も並び、いわゆる職と住がひとつとところで営まれていた。物の大量生産が始まり流通革命が唱えられるとともに、これらの業種店や職人の店がなくなり、物や食が、はては食の原料までもが海外から入ることになって、食生活から文化がなくなり、地域の商店街さらには地域社会も失うことになってしまった。地域を「人がそこに生れ、そこで育ち、そこで安らかに死を迎えるところ」と定義するならば、失われた10年ではないが、元の姿に戻すことなどできるはずもない。

大量生産、大量消費、人口もいまピークを迎え、我々はエポックの只中におかれている。高齢化社会に入り始めたことで人口が減ってゆく。そして出生率のさがったことが、いずれは減少に拍車をかけてゆく。30年後、50年後の人口推計がそれを物語っている。人口が減ることは、生産の規模、消費の規模も縮小する、右肩下がりになってゆく。そのときに甲良町は、どのように考えて行くのか、私には大きな関心事である。

生産性が低い、規模も小さくて専業農家も育たないから、国際価格と太刀打ちできない、と指摘される農業の町、甲良町はたとえ合併の道を選んだとしても、人の住む地域が残っていることには変りはない。人口が減れば当然、働く人口も減るから、働く形態もかわって、定年制などがなくなるときが来るかもしれない。物づくりでもサービスでも、基本に人がいないといいものはできない。今でも後継者難の農業に、タイミングよく人が帰ってきてくれるだろうか。生産人口の働き手たちが、彦根から京阪に出て、日中は住民の姿がまばら、では地域の活性はでてこない。さらに言えば地域を支える産業があってこそ、人はとどまり、地域力がつき、安心して生涯をとじることができるのではないだろうか。

せっかく残してきた農業を今から生かすチャンスができた、と考えればどうだろうか。米・麦・大豆・野菜を生産し、そのまま販売、加工しただけでは地域を養えない。加工直売所をつくり、加工食品を考え出したり、レストランとなったり、おにぎりを売ったり、と様々の試みはされている。京阪という近くの市場は、住民が職場として深いつながりをもっている。甲良米や大麦を原料とした発酵事業を興す、というのはどうだろうか。原料も市場も近いところにあるのは地の利・人の利である。米せん下をアルコール発酵させて、燃料として利用する。蒸留プラントも建屋もすべて地

域でまかない、販売も住民が担当する。

いま地産地消が少しずつだが広がる気配をみせている。個人的な消費はともかくとして、レストランがホテルが飲食店が食材に、というには価格が壁になっている。

こんな売りの仕組は考えられないものだろうか。

法では、製造業種ごとに営業基準が定められていて、例えばおにぎりを作りながら、小麦粉でクレープを焼くと、別々の設備を設置しないと営業許可にならない。いくつか展開しようとしても設備投資が大きくなって引き合わない。

基準を満たすような、小型の営業設置をつくって、地産原料を目の前で加工できないものか。地産地消を会議の席だけで議論していても広がらぬのが現実である。妙な結論になってしまった。

このたびは松本大学アウトキャンパスのお誘いをうけて、何年ぶりかで甲良町の方々と再会できましたことを厚くお礼申し上げたい。甲良町のむらづくり委員会が寺社を中心にまとめ、住民のための地域づくりに奉仕されていることに敬意を表するとともに、やがては彦根市を構成する特徴のある地域として、飛翔することを願っている。

甲良の里は、吉川英治、林屋辰三朗、童門冬二、北方謙三などがひろく紹介しているが、今に歴史を残す集落である。近江が生んだ佐々木道誉のばさらの精神を、私は「自由奔放、杵や型にとらわれない」と理解している。町に留まらず、彦根に留まらず、日本に目を向け、世界を市場とするマンパワーが発揮されることを期待している。